

とで、二人残される仲間に入れられ、どうなることかと心配しながら皆を見送り宿舎に帰ろうとしたときのこと、後ろの方で突然大きな声で、「二人足りない、大至急来てくれ」の声に、我に返り乗船することができ、待ちに待った帰国となる。

いよいよ舞鶴に上陸すると、アメリカ兵が待ち受けていて調査が始まる。いつ、どうしておったのか、ソ連での文化活動についてのことがアメリカ軍の手に入っていて、その調査。三日間の調査の結果、家に帰ることができる。

家に帰り、小さいながら縫製工場を始めて間もない昭和二十四年一月二十一日になって、突然米軍より取り調べのため長野の県庁に出頭するよう命令が来る。県庁に行ってみると、やはりソ連における民主化運動についてであった。日本へ帰るための偽装運動であることの説明をしてもなかなか納得してもらえず、三日間の取り調べの末ようやく納得してもらい家に帰ることができ、長い抑留生活の結末もすべて終わった。

シベリア抑留記

静岡県 松浦和 市

私は、静岡県小笠郡西山口村成滝において、大正十年二月十五日出生、昭和十年西山口尋常高等小学校卒業、その後父母とともに農業に従事する。徴兵にて昭和十七年一月十日福井県鯖江中部六十四部隊へ入隊、一月二十八日中国山東省青洲県益都着、北支派遣秋四二八六部隊に編入。その後、陣部隊と改称。

昭和二十年五月満州興安南省通遼に部隊移動。しばらく熱河省方面を行動中状況悪化により帰途、錦県で陣地構築準備中、終戦の詔勅をラジオで知りました。

混乱の中で、ついに奉天皇姑屯貨物廠において武装解除。その後百名くらいにて付近の部落に宿営。このころより一段と居留民の財産・物資の掠奪、婦女暴行等、満人の暴徒・ソ連兵が横行、日夜無審察状態と化した。丸腰の我々集団ではどうすることもできません。

ん。その後、ソ連の指示により奉天北陵大学に集結。これが抑留の第一歩だ。

ある日中隊長より、今後ハルビンで鉄道補修作業を行い、終了後復員させるとソ連より指令があったので、全員目を閉じ、これに従う者は挙手、反対者は今後自由行動せよ、と説明。しかし、ほとんど賛成しませんでした。その後奉天より客車に乗せられ約一日停車したままでしたが、各車両間にはソ連兵が立哨、他の車両への移動も絶対禁止だ。車窓より外を見れば、散乱した駅構内を日本人の子供たちが一団となり、棒を持った満人の指示で懸命に清掃しており、かわいそうで見ると忍びない光景でした。その後、子供たちは無事に帰国できたか、今も思い出す。

やがて列車は、途中幾度か停車しては、我々に物資積込みの労働をさせながら黒河へと進んだ。時折沿線近くの開拓団であろうか、盛んに手を振って見送ってくれるが、我々は誠に複雑な心境になってしまふ。ついに九月二十六日ソ連ブラゴエシチェンスクに渡る。その夜は付近で野営。近くの住民がパンを持って物資

と交換に集まってくる。また翌朝、私物を盗まれた仲間、あるいは用便中、腰のタオル、また帽子までも持ち逃げされる始末でした。こんな状態で、ソ連兵にも時計、万年筆なども次第に取り上げられた。

また赤い貨車に乗せられ、十月初めの寒い夕方、山間のちよつとした広場へ降ろされた。ここが炭鉱の山ブカチャチャだ。翌朝より、これから入る収容所の鉄条網の支柱材を山より運搬する作業などで数日間働き、やがて古い大きな倉庫を改造した中での生活、周囲は鉄条網で囲われ、四隅には日夜立哨、檻の中の生活が始まった。

いよいよ全く経験したことのない仕事、地下に潜り石炭掘りです。私は帰るまで同じ作業を続けました。三交代で作業を行ったのですが、重い足を引きずりながら薄暗い杭木のカビ臭い中を、カンテラの光を頼りに、またいつ落盤が起るか無気味な地下で、空腹に耐えながら仲間たちとともに励まし合った苦しい労働でした。

当初、満州より持ち込んだ大豆が食糧だった。毎日

毎回大豆だけ、これでは下痢になつて当然。しばらく続くうちに下痢患者が続出。空腹のため毎回全部食べってしまう、ますます下痢が悪化、次第に栄養失調になり、二十年の冬期間、毎朝多勢の死者がソリに積まれて収容所を出た。その後、食糧も高粱、野菜スープ、黒パンなどに変わり、環境になれ、次第に死者も少なくなつてきました。

こんなある日、余りにも少ない食糧ゆえに我々作業班がストを決行したことがあつた。集合の時間ながら所定の所に我々の姿がない。慌てた警備兵がダワイダワイと連呼しながら我々の部屋にかけ込んできたが、我々皆座つたままだ。たくさん食べさせよ、大いに働くからと、作業班長が詰め寄る。この騒ぎで収容所長も来たが、おまえたちがたくさん働けばたくさん食べさせるとの話だ。全く話にならんとはこのことだ。作業班長ついに怒り、裸になり殺せと所長の前に座り込んだ。しかし、おまえたちがどうしても作業に出ないなら、今作業中の仲間たちはおまえたちが行くまで作業を続行させるからと、決断を迫る。我々も交代の仲

間たちのことを思い、仕方なく作業に出たこともありましたが、その後食糧増配もなく、作業班長営倉入りで我々完敗でした。

またこの収容所には水がないので、毎日ソリで水を運び込むため十分に水を使うこともできません。毎日入浴らしきこともなく、ただ板で長方逆三角形の箱をつくり、これを囲んで十人が座り、箱の中に一斗バケツ一杯の湯を流し込みこれで身体を洗う、しばらくしてもう一杯流し込み、これで終わりです。お互いに我れ先にと身体にかけて、終わつてしまふ。

その後いつごろか記憶しておりませんが、公衆浴場へ百名ずつ一時間交代で月一回行くようになりました。ただシャワーだけです、湯、石けんなども十分使うことができたし、終わってから蒸気滅菌した自分の衣服を着て帰ることができるようになりました。このころより収容所も内部など一面に白いペンキで塗られて明るくなり、また四名一組の木枠寝台をつくり起居するようになったが、敷物は包布の中に綿の代わりに製材所の引粉を入れた物です。

あれからもう半世紀になろうとしており、今、当時の記憶をたどりながらつたない文を綴っておりますが、あの異国の地に眠る犠牲者の皆様は、一口に言えば餓死同然だと私は思います。あの寒さ、重労働も、十分食糧があつたなら耐えることができたと思います。私も復員後、抑留中のことを思い起こす暇もなく懸命に頑張ってきましたが、あの不法な抑留がなかったなら、倒れた戦友たちも私たちと同じように、今、孫たちに囲まれて幸せな時代を過ごすことができているはずなのにと、ただただ残念至極に思い、御魂安かれと祈るのみです。

シベリア抑留記

大阪府 竹内 六次郎

私は、大正十二年八月十六日に、大阪市北区菅栄町五八番地において、竹内幸次郎の六男として生まれました。現在の菅北小学校である大阪市立済美第六尋常

高等小学校の高等科を卒業後、稼業の米穀店を手伝っておりましたが、昭和十九年二月十五日に現役兵として満州吉林省林口山の山砲第八七一部隊に入隊、翌二十年四月に同隊の永安派遣隊に転属になりましたが、八月十六日には海林において武装解除を受けました。たまたまそのころにこの地の火薬庫が爆発する事故があり、その爆風により大火傷を負い、その地において火傷の治療を受けましたが、ソ連軍の支配下にて医薬品もなく、背中には「ウジ」がわいていると衛生兵が言っておりました。

ここではテント生活をしながら治療を受けており、十二月になると、そのまま我々三百人の負傷者と他に二百人とで五百名単位の混成大隊を組み、第一チタ地区に入りました。服装は夏の軍衣袴、編上靴で、帯革はしておりましたが、革の帯革はソ連兵にとられたりした者もありました。この服装で零下何十度の地で作業を行ったわけでございます。

チタは旧満州国境からも近く、支給される食糧は余り悪くもなく、僻地における戦友のように「ヒドイ」